



卫生部疾病预防控制局(全国爱国卫生运动委员会办公室) MINISTRY OF HEALTH OF THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA

医療改革進行時：三江源 で「大いなる愛の歌」を歌う —— 玉樹チベット族自治州人民病院の韓惠瑛院長を追記——

中华人民共和国卫生部 www.moh.gov.cn 2011-05-25 10:26:54



三江源雪域の子 韓惠瑛

玉樹地震から一年が経った。記者は、州体育场にある玉樹チベット族自治州人民病院を再度訪問した。廊下を通る人影は昔からもよく知っているが、その中には院長の韓惠瑛はいなかった。

2010年8月23日、48歳の韓惠瑛は自分の愛した事業と親しい人、友人との永遠の別れをした。が、家人や同僚たちの中には、韓惠瑛はまだそこにあるのだ。



若き日の 韓惠瑛

2010年4月15日、記者は、玉樹州人民病院の廢墟で韓惠瑛にインタビューをした。

彼女は、地震前、長年の積み積もった過重労働により青海省人民病院で入院中であり、彼女の体はどんどんひどくなっていた。過敏性紫斑病や高血圧、心臓病、黄疸性肝炎、腹水等、彼女は四六時中病気の痛み苦しめられていたのだ。

『私は医者よ。こんな時にこそ、自分の職務に戻らなくては。。』これは韓惠瑛が地震を知った時に彼女が発した言葉だ。彼女は、直ぐに隊員して、震災救助の第一線に駆け付けた。

全ては患者の為に

山は遥か、目前に草原、雪山の草原、、、美しい玉樹はまるで童話の世界だ。韓惠瑛はここで48年を過ごした。17歳で医師になったが、まさに中年になっていた韓惠瑛だが、彼女は、死にかかっている者を救助し、負傷者を世話するという神聖な事業にその短い一生を捧げた。

2010年4月14日22時、韓惠瑛は地震被害にあった人々が収容されている結古鎮体育场に入った。ここには何万もの帰る家がない人々がぎっしりと並んで座っていた。彼ら怪我人たちの視線に出会い、彼女も涙した。

地震救助の一番難しい時期に、彼女がこの世界に別れを告げる50日前でもあるのだが、彼女は、昼間に廢墟の上を奔走し、衛生防疫を監督し、支援救助隊に対して物資の分配を手配した。夜になると、同僚たちは頬が腫れあがった韓惠瑛が点滴をぶら下げ、ベッドで横になって縮こまり、歯を食いしばり腹部の疼痛に堪えているのを見ることになった。



明眸工程指定医院となって

同僚たちは言う、「平時でさえ彼女はいつも診療と業務に明け暮れている。アカデミックリーダーとして、彼女は院内全職員に州内全児童の健康活動全面調査を展開し、高病原性小児科の難病を研究し、地区の児童健康ネットワークを構築し、玉樹児童健康データの空欄を埋める一方で、院長として、次々と改革と創造のエンジンを起動して、州委員をして一項また一項目と次々と新技術・新プロジェクトを展開してきた。彼女の東奔西走につれ、地震前には委員の外来部門が拡張され、入院医療技術総合棟が立ち上がり、高圧酸素室も落成し、全州初のDR(デジタルラジオグラフィ)を操作していたんだ。。。」

党旗は天高く翻り

被災地区の廢墟で、少なくない人が韓惠瑛に「韓院長、貴女の様な情況だったら、ここまで来られたというだけでも、凄く立派なことです。命までかけて頑張らなくても。疲れの為にご自身の身を損なってしまったら罰が当たるよ」と話しかけるが、韓惠瑛は、これには答えずただ笑うだけだ。彼女は、被災地に来る前までは生死を度外視してい

たが、生と死の問題上にあつて、彼女は今、一つの選択をしたのだ。

2010年4月14日、玉樹に向かう路上で、韓恵瑛は病院に電話を掛けて、五つの緊急任務を出した：①全職員に直ぐに元のポストに戻るよう緊急に通知をだすこと；②院内患者や家族、職員を緊急に分散させること；③医療グループ・看護グループ・薬品機器の搬送グループ、調薬グループ、後方勤務保障グループ、遺体移送登録グループ、“120”コールセンターと職員負傷死亡統計グループなど10のグループを緊急に組織すること；④患者の救助活動を緊急展開すること；⑤医療救護チームを作り、競技場や体育場に被災した人々を誘導することの五つの任務だ。

当日の22時過ぎ、韓恵瑛は州病院に到着し、朝から晩まで仕事を共にする同僚たちが一斉に集まりだした。略帯が干からびる程の寒風が空き地を吹き抜け、懐中電灯の明かりが目射、多くのものが抱き合つてむせび泣き、思わず涙がどつと出てきてしまう。

韓恵瑛の組織指導の下、怪我人の救急治療活動は整然と進められた。避難場所では、星が点々と光を放ち、重症患者の会診は夜中まで続けられた。午前2時になり、牽引車のホーンが夜空を引き裂き、第一隊の救助隊が到達した。韓恵瑛と皆は一様に排気ガスを吸い込みながら、救援物資の荷降ろしをし、時間と闘いながら、空き地に可動式のテントを張り、注意深く重傷者を運び込んだ。コレラ一切が終わった時、時間は既に15日の明け方になっており、韓恵瑛は医療救助ゾーンにて怪我人を運ぶ通路の手配と薬品の手配をおこない、耐えず家族に対して注意すべき事項を説明していた。

二日目の正午ごろ、全国各地から来た大量の救援物資が絶えず被災地区に到着、州病院は援助物資を次々と登録され入庫され、如何なる損失もなかった。負傷者ばかりでなく、多くの被災した人々がテントに分かれて入っており、家族には幾枚かの布団やビスケット、缶詰、ソーセージ、ミネラルウォーター等の食品を十分に与えた。彼女は、身辺の医療人員に「我々は多くのものを失つたけれど、希望を失うことだけは絶対にできないわよ」と告げた。

4月18日午前まで、州病院は3,000人超の負傷者を救済し、100余を安全に移送した。看護師長が報告の際に「負傷者の数は急速に落ち着きを見せ、人々の感情も穏やかになった」というと韓恵瑛は長い溜息をつき、自分に対して、そして同僚たちに対して、『一番難しい段階に来ちゃったわねえ』。

韓恵瑛は、相槌を打ちながら、病院の総合的損傷状況と職員家庭や生活状況を院内のメンバーグループが調査を始めるのに立会い、震災後の再建に精確で信頼できる材料を見出そうとした。ここ数日、彼女は何度も危険な階に這い上がり、ついに二名の看護師により強制的に彼女を救急車で休息をとらされることになった。

救済現場で倒れる

被災地区に居る間、韓恵瑛はきっと自分自身が治療中の重病患者であることを忘れていたのではないか。一部職員の家族たちが不幸にもなくなり、多くの職員は帰るべく家もなくなり、彼女は家を訪れ、慰問に訪れ、か細い声で、ゆっくりと話しながら、同僚たちを慰めた；飲食や寝泊まりに存在する問題は、彼女が殷内に簡易食堂を作らせ、テントや布団等の物資を患者や家族、職員たちに与えた。病身の韓恵瑛が狭くて、込み合い、氷の様に冷たい救急車で活動を続ける生活を何十日もしているのだとは、人々の考えも及ばないことだった。



担架に乗せられ
移送される韓恵瑛

州病院と済南軍区方艙病院は結合を実現しなければならず、彼女は人員や設備、薬品等で協力をした；第一次の災害復旧プロジェクトを実施し、彼女は痛みに忍耐強く耐えながら、設計方案を諮問し、プロジェクト用地を手配し、連日あくせくと奔走したのだった。

時が経つにつれ、韓恵瑛は実際我慢できなくなった。2010年7月3日、多種の疾病により昏迷に陥り、彼女は、青海省省人民病院に転送された。病院側は危篤の通知書を下達し、更に北京に転送し、治療を受けさせることにした。

8月13日、昏迷中に息を吹き返した彼女は、大きな土石流災害の発生していた甘肅省舟曲被災地に1,000円を献金してねと家人に委ねた。黙々と妻の要求に基づき、夫は彼女が最後にやりのこしたことを実践した。

(<<健康報>>5月25日1版)

..... 以下是中国語原文

医改进行时：三江源谱写大爱之歌

——追记玉树藏族自治州人民医院院长韩慧瑛

中华人民共和国卫生部 www.moh.gov.cn 2011-05-25 10:26:54

玉树地震过去一年了，记者再次踏进设在州体育场的玉树藏族自治州人民医院。在一排排过渡板房间穿梭的身影曾经那样熟悉，然而其中再也没有了院长韩慧瑛的身影。

2010年8月23日，48岁的韩慧瑛永远离开了自己深爱着的事业和亲人、朋友。但是，在家人和同事们的感觉里，韩慧瑛从不曾离去。

2010年4月15日，记者在玉树州人民医院的废墟上采访过韩慧瑛。

地震前，她正在青海省人民医院住院治疗，因长年累月地超负荷工作，她的身体每况愈下，过敏性紫癜、高血压、心脏病、黄疸性肝炎、腹水，使她无时无刻不在忍受着病痛折磨。

“我是医生。这个时候，我应该回到自己的岗位上。”这是韩慧瑛在获知地震后说的第一句话。随后，她毅然出院，奔赴抗震救灾一线。

一切为了患者

远山近野，雪山草原，美丽的玉树一如童话般的世界。韩慧瑛在这里生活了48年。17岁从医，已届中年的韩慧瑛几乎将自己短暂的一生都献给了救死扶伤的神圣事业。

2010年4月14日22时，韩慧瑛进入结古镇体育场地震受灾群众安置点。这里密密麻麻地坐满了成千上万无家可归的人。当韩慧瑛和受伤群众的目光相遇时，她流下了眼泪。

在地震救援最艰难的时候，也就是在她离开这个世界前的50多天里，白天，她奔走在废墟上，监督卫生防疫，对接援助单位，安排物资分发。夜间，同事们一次次看到面颊浮肿的韩慧瑛挂着点滴，蜷缩着身体躺在病床上，咬牙强忍腹部疼痛。

同事们说，即使在平时，她也总是每天忙于诊疗和业务。作为学科带头人，她组织全院职工开展普查全州儿童健康工作，研究高原性儿科疑难重症，建立地区儿童健康网络，填补了玉树儿童健康数据的空白；作为院长，她一次又一次启动着改革和创新的引擎，使州医院开展了一项又一项新技术、新项目。经过她的多方奔走，地震前，医院门诊部扩建了，住院医技综合楼盖起来了，高压氧舱落成了，全州第一台DR运行了……

党旗高高飘扬

在灾区的废墟上，不少人曾对韩慧瑛说：“韩院长，像你这种情况，能来这里已经很了不起了，不要命地干，累垮了自己要受大罪的。”对此，韩慧瑛不作回答，只是笑笑。在来灾区之前，她就已把生死置之度外，在生与死的问题上作出了选择。

2010年4月14日，在赶往玉树的路上，韩慧瑛通过电话给医院布置了5项紧急任务：紧急通知全院职工立即返回岗位；紧急疏散院内患者、家属和职工；紧急成立医疗组、护理组、药品器械运送组、配药组、后勤保障组、遗体转移登记组、“120”通道组和职工伤亡统计组等10个小组；紧急展开抢救伤病员工作；紧急成立医疗救援队，奔赴赛马场、体育场等受灾群众安置点。

当天22时多，韩慧瑛赶到州医院，和朝夕相处的同事们聚集在一起。略带干涩的寒风吹过空地，手电筒射出刺眼的光束，大家哽咽着抱在一起，泪水不禁夺眶而出。

在韩慧瑛的组织领导下，救治伤员的工作有条不紊地紧张进行着。安置点上，星星点点的灯光闪烁，重症伤员的会诊在夜里进行。到了凌晨2时，拖挂卡车喇叭声划破了灾区的夜空，第一批救灾帐篷运到了，韩慧瑛和大家一样喘着粗气，卸下救灾物资，抢时间在空地上搭建帐篷，小心翼翼地将重伤员抬进去。这一切完成时，已是15日清晨，韩慧瑛继续穿行在医疗救助区里，安排转运伤员的路途药品供应，还不时向家属讲解注意事项。

第二天正午时分，来自全国各地的大批救援物资源源不断地运到了灾区，州医院将援助物资陆续登记入库，没有任何损失。不仅是伤员，连大多数受灾群众都分到了帐篷，一家人可以领到几床被子，饼干、罐头、火腿肠、矿泉水等食品供应充足。她告诉身边的医护人员：“我们虽然失去了很多，但绝不能失去希望。”

截至4月18日上午，州医院共救治伤员3000多人，安全转运100余人。护士长汇报说，伤员数量趋于平稳，大家情绪相对稳定，韩慧瑛长出了一口气，像是对自己又像是对同事们说：“最艰难的一段路，我们挺过来了。”接下来，韩慧瑛会同医院班子成员开始对医院的整体受损情况和职工家庭及生活状况进行调查，以便为灾后重建拿出一份翔实可靠的材料。那些天，她无数次爬上危楼，直到被两名护士强行扶走并安排在救护车上休息。

她累倒在救灾现场

在灾区的日子里，韩慧瑛好像忘记了自己还是一个正在接受治疗的重病患者。部分职工家中亲人不幸离世，大多数职工无家可归，她去走访、去慰问，细声慢语地劝慰同事们；饮食、住宿存在问题，她组织人员在院内设立简易食堂，把帐篷、棉被等物资分发给患者、家属和职工。人们想不到的是，拖着病体的韩慧瑛在狭小、拥挤、冰冷的救护车里工作和生活了几十天。

州医院与济南军区方舱医院要实现对接，她协调人员、设备、药品；落实第一批灾后重建项目，她强忍病痛，征询设计方案，安排项目用地，连日操劳、不停奔波。

随着时间推移，韩慧瑛实在是挺不住了。2010年7月3日，因多种疾病并发导致昏迷，她被转往青海省人民医院，院方下达病危通知书后，又紧急转送北京接受治疗。

8月13日，从昏迷中苏醒过来的她，委托家人向发生特大山洪泥石流灾害的甘肃舟曲灾区捐款1000元。丈夫默默地按妻子的要求，做了她最后要做的一件事。（《健康报》5月25日1版）